



2025 年度活動報告書

特定非営利活動法人パノラマ

2025 年度事業一覧

1. 子ども・学校支援事業部	
(1) 子ども事業～青葉区寄り添い型生活支援「.5 てんご」	青葉区委託事業
(2) 学校連携事業 ①高校入学前支援事業 ②朝食提供事業（朝 BORDER） ③校内居場所カフェ＋食支援事業（2校） ④校内個別相談（2校） ⑤ボランティアさん養成講座 ⑥卒業生・中退生支援 ⑦校内居場所カフェ全国ネットワーク設立準備委員会	神奈川県教育委員会委託事業／助成事業（フローレンス）
2. 若年者就労支援事業	
(1) 有給職業体験「バイターン」事業 ①北部ユースプラザ・バイターン ②学校連携バイターン ③他団体へのバイターン導入支援	助成事業（中央共同募金会 赤い羽根福祉基金）
3. 若者自立支援事業	
(1) よこはま北部ユースプラザ事業	横浜市補助事業
4. 中高年ひきこもり支援事業	
(1) ブリッジ	自主事業
5. 啓発事業	
(1) 校内居場所カフェ・スタッフ養成講座事業	自主事業
(2) 各種広報事業	自主事業
6. 事務局	
(1) 組織基盤強化事業	助成事業（Panasonic NPO/NGO サポートファンド）

1. 子ども・学校支援事業

(1) 青葉区寄り添い型生活支援事業 .5 (てんご) ～事業概要～

生活困窮状態にあるなど養育環境に課題があり、支援を必要とする家庭に育つ小・中学生等の生活支援事業。将来の選択肢の幅を広げ、生まれ育った環境に左右されることなく学習習慣及び生活習慣を身につけ、自立した生活を送れるようになることを事業目標としている。また、当法人としては田奈高校との連携により中高接続支援の実現を目指すとともに、青葉区という地域と連携を深めることで切れ目のない支援の場づくりをしていく。

【青葉区寄り添い型生活支援事業についてのお知らせ】

当法人は、令和7年度をもって「青葉区寄り添い型生活支援事業」（法人事業名 てんご）の受託運営を終了いたしました。

本事業では4年3ヶ月にわたり、多くの子どもたちと出会い、安心して過ごせる居場所づくりや、家庭・学校・地域をつなぐ支援に取り組んでまいりました。その中で、子ども一人ひとりに丁寧に関わることの大切さや、継続的な伴走支援の意義について、多くの学びと経験を得ることができました。

この間、令和8年度からの横浜市における当事業の設置根拠法及び委託内容の変更、事業環境の変化を受け、今後求められる支援のあり方や体制について法人として慎重に検討を重ねてまいりました。

その結果、新たな事業枠組みのもとで事業を継続するよりも、これまで培ってきた知見を別の形で活かし、法人の理念や強みをより発揮できる取り組みに注力していくことが望ましいとの判断に至りました。

そのため、本事業を一区切りとし、令和8年度からの青葉区からの寄り添い型生活支援事業委託事業者募集に、応募することを見合わせることにいたしました。これまで事業を支えてくださった関係機関の皆さま、地域の皆さま、そして現場を支えてきたスタッフに、心より感謝申し上げます。

なお、本事業終了後も、青葉区における子ども・若者支援は、新たな体制のもとで引き続き取り組んでいく予定です。引き続き、当法人の活動にご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

(2) 学校連携事業

①大和東高校朝食提供事業～事業概要～

「学校での食支援を通じて心身の健康の改善を図り、学習に取り組む姿勢につなげることや生徒が教職員以外の大人と話せる居場所を作ること、大人が生徒の悩みに気付き、生徒一人ひとりに寄り添い、支援すること」を目指して 2022 年度より県内 4 校で始まった神奈川県教育委員会の委託事業。当法人では大和東高校の朝食提供事業を受託。

朝 BORDER 振り返り

本年度、経理・会計以外の多くがパノラマの手を離れ、火曜日が Y 本さんチーム、金曜日が子ども食堂プロジェクト AT やまとのネットワークにより運営され、シフトの穴埋め的に石井が参加する形で運営された。大和市の職員の方が出勤前に手伝いに来て下さっていたり、生徒たちに美味しい朝食を食べて貰えるよう、少ない予算、短い調理時間の中、やり甲斐を持って創意工夫して下さっている姿が印象的で、それに応えるように生徒たちの笑顔が溢れる時間になっていた。

また、本年度をもって神奈川県事業としての朝食事業は終了し、県からの財政面での補助はなくなった。学校や AT やまとの話し合いの結果、R8 年度からはパノラマは実施に関わらず、AT やまとの自主事業として、毎週火曜日のみとなるが開催を継続することになった。パノラマは今後もクリスマス・パーティー等で、AT やまとの協力関係は継続していく。

2025 年度実績

	開催数	参加生徒数	参加スタッフ数
2022 年	43 回	643 名／平均 15 名	延べ 90 名
2023 年	56 回	1,673 名／平均 30 名	延べ 187 名
2024 年	62 回	2,157 名／平均 35 名	延べ 180 名
2025 年	59 回	2,089 名／平均 35 名	延べ 166 名

※2025 年 6 月 20 日～2024 年 3 月 17 日で実施

②校内居場所カフェ＋食支援事業（２校）

高校内に居場所カフェを開き、スタッフや多様なロールモデルであるボランティアさんと、日常会話から信頼貯金を貯めつつ、将来の糧となるヒト・モノ・コトの文化資本を高校生に提供する。中退や進路未決定の予防にとどまらず、将来的な社会関係資本への接続から経済資本の獲得を見据えた事業。

連携団体：一般社団法人お寺の未来（おてらおやつクラブ）、フードバンクかながわ 他

校内居場所カフェ振り返り

ぴっかりカフェは、これまで学校に「過剰適応」し、昨今の物価高も相まって課題や困難が深刻化しながらも、それらが表面化しづらい生徒たちをいかにして発見し、支援していくのが課題だった。こうした状況下で、学校の運営方針の変更によりテスト１週間前のカフェが休止となり、開催数が減少した。一方で、長期休み期間中の生徒の生活の様子が気になっていたことから、かつて行っていた夏休みカフェが今年から復活することとなり、カレーパーティーと普段よりも多めの食べものの配布会を実施した。夏休みということで定期が切れている生徒も多く予想される中で、カフェの常連生徒を中心に４０名ほどが参加した。普段休み期間の学校内で、スタッフ・ボランティアと生徒みんなでカレーを作って食べるという非日常の経験が、生徒たちにとっては大好評だった。

BORDER CAFE は大人の人手不足が慢性的に続き、運営することで精一杯な状況が課題だったが、生徒たちがカウンターのお手伝いや片付けをしてくれることや、昨年度のボランティア養成講座が功を奏し、ボードゲーマーの方が準レギュラーボランティアとなってくれたことで余裕が生まれてきた。こうした余裕から、休止していた味噌汁の提供も継続して行うことができ、生徒との「信頼貯金」も形成されはじめ、支援情報が溜まってきたことから、先生や朝カフェのスタッフを交えて生徒の情報交換会を実施した。また、ぴっかりカフェと同様に BORDER CAFE でも夏休みカフェとミニ浴衣パーティーを開催した。さらに３月の合格者体験会では、昨年も参加してくれたかつての常連の卒業生に加えて、中退生も一緒に参加してくれた。そして、４月からはじまったカフェでは今春卒業した進路準備中の生徒が手伝いに来て、定期的な参加が望まれることとなった。このように、卒業生・中退生とカフェの関係が継続されていることは喜ばしいことである。

2025 年度実績 （ ）内は前年度の実績

	開催数	生徒参加数	ボランティア参加数
ぴっかりカフェ 神奈川県立田奈高等学校	29 回 (35 回)	1,416 名／平均 49 名 (1,656 名／平均 47 名)	235 名 (256 名)
		中退生／卒業生参加数	食べ物配布会
		102 名 (67 名)	17 回／571 名 (14 回／418 名)
BORDER CAFE 神奈川県立大和東高等学校	37 回 (34 回)	2,095 名／平均 57 名 (1,446 名／平均 43 名)	113 名 (58 名)
		中退生／卒業生参加数	食べ物配布会
		12 名 (5 名)	13 回／556 名 (9 回／239 名)
合計	66 回 (69 回)	3,511 名／平均 53 名 (3,102 名／平均 44 名)	ボ：348 名 (314 名) 食：1,127 名 (657 名)

イベント報告

7 月 17 日（木） 田奈高校ぴっかりカフェ浴衣パーティー

8 月 1 日（金）大和東高校 BORDER CAFE 夏休み開催

8 月 8 日（木） 田奈高校ぴっかりカフェ夏休み開催（写真左）

12 月 18 日（木）田奈高校ぴっかりカフェクリスマス・パーティー

12 月 19 日（金）大和東高校 BORDER CAFE クリスマス・パーティー（写真中央）

1 月 29 日（木）田奈高校 3 年生ラスト・ぴっかりカフェ。NPO 法人はんなり和菓子ラボさんから紅白饅頭を配っていただいた。

3 月 16 日（月）大和東高校 BORDER CAFE 体験会@新入生合格者説明会（写真右）



④個別相談事業「Drop-in」～事業概要～

カフェで早期発見した課題を、信託貯金を使いながらソーシャル・ワークへと発展させていく。教員が気づいてない世帯の課題や、発達障害等を発見し、学校やSC、SSW等の専門職と共有することで、中退や進路未決定を予防するとともに、中退後のサポートを可能とする基盤作りを目的とした事業。年間80件程度の個別相談を実施。田奈高校は北部ユースプラザの出張相談事業に位置づけている。

個別相談事業「Drop-in（どろっぴん）」の振り返り

ぴっかりカフェと併せて担当していたK先生（キーパーソン）が、夏休み明けから休職し、代わりの担当がついたものの相談数が激減した。生徒支援及び外部連携がキーパーソンの属人性に依存した運営であることが、改めて浮き彫りになった出来事だった。人事や組織体制に関与できないから仕方がないと諦めるのではなく、管理職やキーパーソン教員とのコミュニケーション（エンパワメント等の支援的な関わり）を意識し、校内の生徒支援の仕組みとして確立していくことを目指し活動していきたい。

また、近年の生徒層の変化も相談数の減少につながっていると感じている。具体的には、学校への適応・順応性の表面的な高さである。学校やカフェで楽しく過ごす術に長けているが、様々な課題を先送りしているように感じている。楽しいカフェは悪いことではない。しかし、楽しいだけのカフェから、大人たちとの会話を通じて、一歩踏み込み自身を見つめることのできるような自然な仕掛けから、「Drop-In」を通じて、自分の人生にしっかりと向き合う大切な時間が作れるようにしていきたい。

尚、本年度より事務局長谷口や、カフェスタッフの褒も相談スタッフとして同席している。

2025 年度実績 () 内は前年度の実績

	開催数	相談件数
神奈川県立田奈高等学校	13 回(22 回)	19 件(29 件)
神奈川県立大和東高等学校	0 回 (0 回)	0 件 (0 件)
合計	13 回 (22 回)	19 件 (29 件)

⑤ボランティアさん養成講座～事業概要～

先生でも親でも支援者でもない、フラットな立ち位置で生徒と接していただくボランティアさんに、ミッションの理解や、引きこもり等の若者が置かれている実情（対処型支援）を知ること、校内居場所カフェ（予防型支援）の意義と価値をご理解いただき、コンプライアンスへの誓約をしていただく。

2022 年度より後述する朝食提供事業がスタートしたことにより、朝食提供事業のボランティア・準スタッフも養成講座を受講することで参加いただけるようにしている。

ボランティアさん養成講座の振り返り

ボランティア養成講座はこれまで講座受講からボランティア参加につながるが少ないことが課題であり、ボランティア養成講座を受講後、3 ヶ月以内に一度はボランティアとして参加するという参加条件を設けた。その結果、2025 年度初頭に行った養成講座では 3 名全員が 1 ヶ月以内に参加し、一人は準レギュラー、もう一人も定期的にボランティアとして参加していただけるようになった。しかし、その後も開催を試みたものの、参加条件の厳しさや参加予定人数の少なさから講座を中止し、希望者にはカフェに直接お越し頂き、事前レクチャーを石井から行うことで対応した。

2025 年度実績 () 内は前年度の実績

	開催数	参加数
養成講座	1 回 (2 回)	3 名 (12 名)

⑥中退者・卒業生支援～事業概要～

卒業生や中退生の支援は、カフェが起点になり始まる 경우가多くあります。卒業後にふらっとやってきて、少し心配な話があり、そこから相談がスタートするケース。カフェボランティアに来てくれている中で、相談へと切り替わっていくケース。そして、LINEでのつぶやきから相談がスタートすることが多く、多くが対面で会って話をするというよりも、日常会話を含めた細々としたLINEのやり取りの中で、少しずつ少しずつ相談の概要が見えてくることも多いのが大きな特徴である。

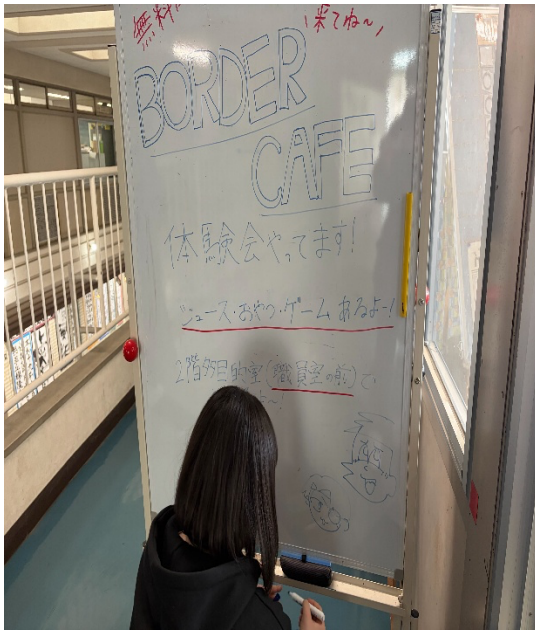
パノラマでは、公式LINEを作り、卒業生や中退生に渡す「おまもりカード」に掲載をして配布している。また、卒業後や中退後の相談の中には生活困窮や家庭からの分離など、制度のすき間の緊急支援も多くあることから、「フレームイン基金」を立ち上げ、随時寄付を募っている。

中退者・卒業生支援の振り返り

昨年度と同様、卒業生の数が安定しているのは卒業生2名の滞留が起きているからである。そのうちの一人、卒業生Aは卒業後からほぼ毎回カフェに来ている。大学中退後、B型作業所の利用を開始したものの続かず、在学中から現在に至るまで希死念慮が強い。背景には世帯の問題がある。昨年度はケースワーカーさんと連携を強化し、どろっぴんに4回ほど参加していただいたり、グループホームの見学にも一緒に参加したりする等、前進を見せた。この卒業生Aは北部ユースプラザにも一度足を運び途切れたものの、本人からまた行きたいとの打診があった。今後は法人全体でこの卒業生Aの支援を行っていくために、世帯に携わっている支援者や行政担当者、さらに北プラとも連携を図り、支援会議を定期的に行っていく。

2025年度実績（ ）内は前度の実績

	神奈川県立田奈高等学校	神奈川県立大和東高等学校
中退生	5名(4名)	1名(0名)
卒業生	97名(63名)	11名(7名)
合計	102名(67名)	12名(7名)



【エピソード】大和東高校で毎年行っているカフェ体験会に参加してくれる卒業生が、今年は中退した生徒を連れて参加した。中退生 A はこの卒業生と一緒にカフェに来ていたものの、2年生の終わりに中退した。卒業後も繋がれるように、当時はお守りカードを配布したものの、そこから音沙汰はなかった。久しぶりの再会に懐かしい気持ちを覚えながらも、「学校を辞めたことに後悔はない」と語りながら、現在の様子を聞く。しばらくして、一緒にきた卒業生がかつての先生たちに会いに職員室に向かうことになり、A は「私は行っても…」と、居心地の悪さを感じていた様子でつぶやきながら、遅れてついて

いった。すると、「えっ、ええ！元気してた??」と驚きを隠せない先生が A に駆け寄りながら声をかけ、A も先生が自分を覚えていてくれたことに喜び、話に花が咲いていた。その後、A の表情は明るくなり、カフェ体験会のボードに、かつての在学中の頃のように絵を描き、馴染んでいった。そして体験会が終わり、A は「久しぶりに色んな人と話せてとても楽しかった。また絶対来る」と言い残し、学校を後にした。このように、卒業生だけでなく、中退生が先生と出会い直せること、その媒介としてカフェがあることの意義を、改めて強く感じたエピソードであった。

卒業式に配布しているカフェ案内のチラシ

昨年度よりお守りカードからチラシへと変更を行った。これはお守りカードと同じく公式 LINE の案内に加えて、カフェの SNS である Instagram も載せ、卒業後カフェに繋がるハードルを下げるためである。



⑦校内居場所カフェ全国ネットワーク～事業概要～

校内居場所カフェ全国ネットワーク（以下、全国ネット）は、WAM の制度化検討委員会や WAM のコンサルテーションを通じて、制度化を目指すのならば、1 団体で声を上げるのではなく、全国で居場所カフェを運営する複数団体の総意として、政策提言をつくり、国に訴えるべきとの助言をいただいたことから始まった。現在の幹事団体は以下であり、当法人が事務局を務めている。

幹事団体

1. NPO 法人パノラマ
2. 認定 NPO 法人 Switch（宮城）
3. NPO 法人しずおか共育ネット（静岡）
4. 認定 NPO 法人心燈（長崎）
5. NPO 法人こどもソーシャルワークセンター（滋賀）
6. NPO 法人あそと（大阪）

本年度は、会員からのアンケートでの交流ニーズの高さに基づき、オンライン・イベントを 4 回開催し、188 名の参加があった。参加者たちは、総じて何かを模索し、道標となるヒントのようなものや、自分たちの取り組みの正しさを見つけ出そうとしているように感じている。このような焦燥感に対して、安直な誘導をすることなく、参加者同士の対話の中から、気づきとしての正解を各自が得てもらえるような運営ができていることは、幹事 6 団体が友好的に機能していることに他ならないと感じている。

5 月 14 日（水）2025 年度第 1 回オンラン・イベント

大阪府立西成高等学校校長 山田勝治氏による基調講演「校内居場所カフェの意味・未来への期待」及び、山田校長と上智大学教授の澤田稔氏、当法人理事長石井正宏によるディスカッション「校内居場所カフェが学校文化に根付くためには」を開催し、86 名の参加があった。

8 月 28 日（木）2025 年度第 2 回校内居場所カフェ・オンラン全国交流会「エピソード・ベースで語り合おう Vol.1」として、居場所性とソーシャルワークにまつわる 3 つのエピソードを元に、ご参加者のみなさんと話しながら一緒に考え深めた。29 名の参加があった。

12 月 3 日（水）2025 年度第 3 回校内居場所カフェ・オンラン全国交流会では、前回ご好評いただいた企画を、より交流場面を増やした形で、「エピソード・ベースで語り合おう Vol.2」を実施し、14 名の参加があった。

2月24日（火）2025年度第4回校内居場所カフェ・オンライン全国交流会では、こども家庭庁支援局虐待防止対策課企画官の朝比奈卓氏をゲストに「こども家庭庁の担当者に訊く！子ども若者施策の中の校内居場所カフェ」を実施。59名の参加があった。

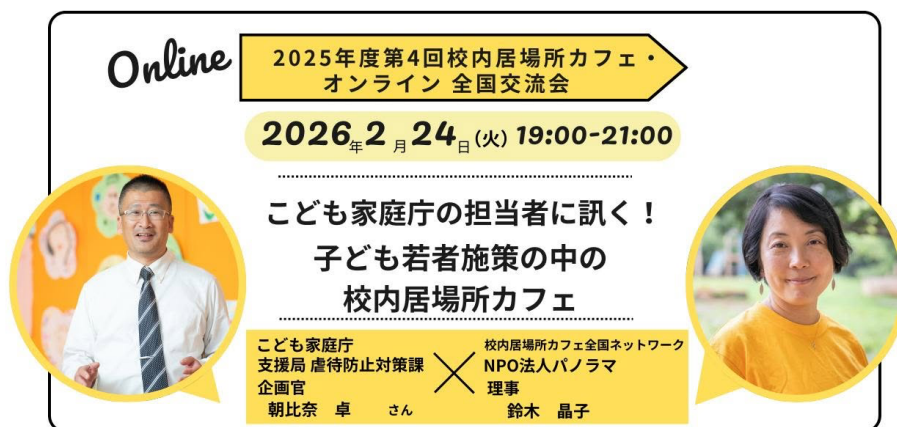
2025年度会員数

プレイヤー会員（団体）31団体

サポーター会員（団体）6団体

プレイヤー会員（個人）9名

サポーター会員（個人）



※全国ネット第4回イベントのバナー

2. 若年者就労支援事業

(1) 有給職業体験バイターン～事業概要～

働くことに強い不安を抱え、アルバイトに就けない生徒や引きこもり等を経験した若者がいる。就職協定から切り離れた福祉的マッチングを必要としている生徒や、通常の履歴書/面接を経た就労が困難な若者が多くいる。このような生徒が、進路未決定からひきこもり等に陥るリスクが極めて高く、引きこもり等の若者たちの出口支援として就労支援がなければ、経済的自立状態に辿り着くことができない。“安心できる大人”のいるアルバイト先を紹介し、3日間の無給の職場体験を経て有給のアルバイトとなり、働くための基礎体力をつけ、一般の就職活動をしてもらうか、そのままアルバイト先での就職を目指すことを目的とした事業。

実施校：神奈川県立田奈高校

実施機関：よこはま北部ユースプラザ

有給職業体験バイターンの振り返り

2025年度のバイターンは、2024年度に引き続き「赤い羽根福祉基金」を活用して実施した。以下は、2025年度の助成金報告書より抜粋

生保バイターン：校内居場所カフェを実施しているA校では、毎年「支援の手引き」が刷新され、教員に配布されている。その中に校内居場所カフェと個別相談、バイターンの項目が組み込まれており、その説明として「生活保護制度では、引越費用（進学・就職時）、就職準備費用、世帯転出のための初期費用など、自立に向けた目的がある場合、アルバイト収入の一部を将来に向けて積み立てることが認められる場合があります。バイターン+制度活用で生徒の自立を応援していきましょう。」という一文を入れていただくことができ、教員内の支援マインドの醸成が徐々に進んでいると感じられている。

北部ユースプラザ：もともとのバイターンとして就労した若者は1名に留まったが、その手前のスモールステップである有償ボランティア、法人内バイターンが増えたことにより、多くの若者が一歩を踏み出すことができた。Aさんは週1からスタートしたバイターンだが、1年経ち、週2から週3へと着実に勤務日数を増やしている。

有償ボランティア先が2か所になり、延べ6名の若者が直行直帰で勤務できている。同じ現場を担当している若者同士で清掃のポイントを共有しあったり、体調不良の際の交代をしたり等、自分たちで主体的に動く様子がみられた。

新しく増えた有償ボランティア先では、若者が提案した清掃方法が採用されたり、現場で任されたりするようになっている。さらにハードルの低い法人内バイターンが始まったことで、スタッフに見守られながら一歩を踏み出した若者が、地域イベントへのボランティア参加など、プレバイターンへと行動が広がっている。有償ボランティアや法人内バイターンなどで働くことへの見通しや、自信を少しつけた若者が、複数の一般アルバイトへ応募するなどの動きが見られた。

法人内バイターン：有償ボランティアや法人内バイターンでミスやイレギュラーがあった際にも、前向きに捉えたり切り替えたりする姿が見られており、頼もしさを感じている。一般アルバイトに応募したものの採用には至っていないが、不採用になっても必要以上にショックを受けず、前を向くことができている。

【2025 年度の実績】

●バイターン

	2023 年度	2024 年度	2025 年度
参加延べ 人数	18 名（田奈高校 1 名 含む）	17 名（田奈高校 0 名含む）	6 名（田奈高校 0 名）
体験延べ 回数	11 回	17 回	6 回
参加者数	7 名 内訳：採用 1 名、 辞退 6 名、	5 名 内訳：採用 2 名、辞退 2 名 先方都合不可 1 名（スタッ フ不足で教育できないとのこと）	1 名 内訳：採用 1 名
採用者	1 名 内訳：中途退職者 1 名	2 名 内訳：就労継続中 2 名	1 名 内訳：就労継続中 1 名
受け入れ 企業数	4 社 内訳：清掃業、動物 広場、デイサービ ス、美容院	2 社 内訳：WEB 関係、デイ サービス	1 社 内訳：デイサービス
新規・再発 掘 企業数	3 社 内訳：ボイス、ふれ あい動物広場、イタ リアンバルバンビ ーノ	0 社	1 社 内訳：万葉のさと梶ヶ谷

●法人内バイターン

	2023 年度	2024 年度	2025 年度
参加延べ 人数		15 名（田奈高校 0 名含む）	33 名（田奈高校 0 名含む）
体験延べ 回数		15 回	33 回
参加者数		9 名	8 名
受け入れ 企業数		2 社 内訳：ネットショップ、 パノラマ	2 社 内訳：ネットショップ、 パノラマ
新規・再発 掘 企業数		1 社 森ノオト	0 社

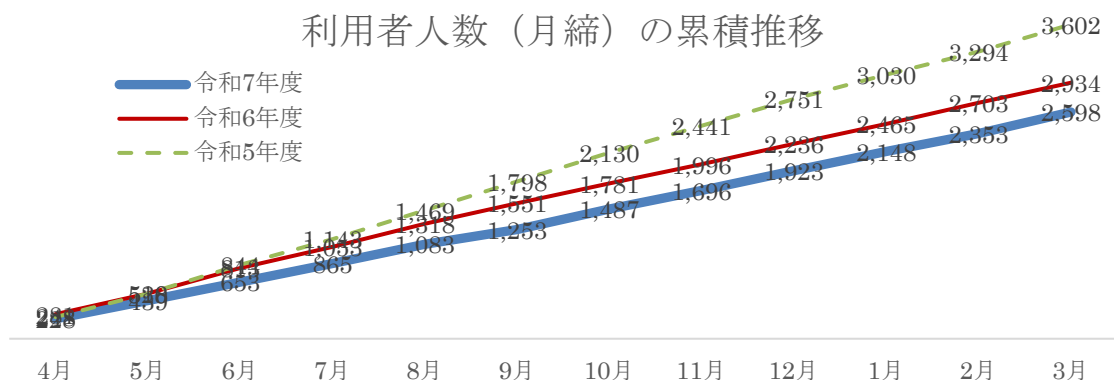
3. 若者自立支援事業

(1) よこはま北部ユースプラザ（横浜市補助事業）

よこはま北部ユースプラザ：不登校、ひきこもりなどの思春期・青年期の総合相談

1. 区役所におけるひきこもり等の困難を抱える若者の相談の実施
2. ひきこもりからの回復期にある若者の居場所の運営
3. 社会体験・就労体験プログラムの実施
4. 地域の関係支援機関、区役所との連携及び地域ネットワークづくり
5. 応援パートナーの養成・派遣

本年度は、改めてスタッフのチーム体制を再構築することを進めながら、同時にどのような支援現場を作っていきたいのかを模索しながら実績を追求した1年であったと言える。まず、スタッフのチーム体制の再構築では、後述する基盤強化事業を活用したことで、チームの共通の価値観やスローガンのようなものを獲得できた。また近年、各ユースプラザの利用者数が軒並み減少しており、北プラも例外ではない。以下のように、3年間で毎年500名程度の減少がみられている。



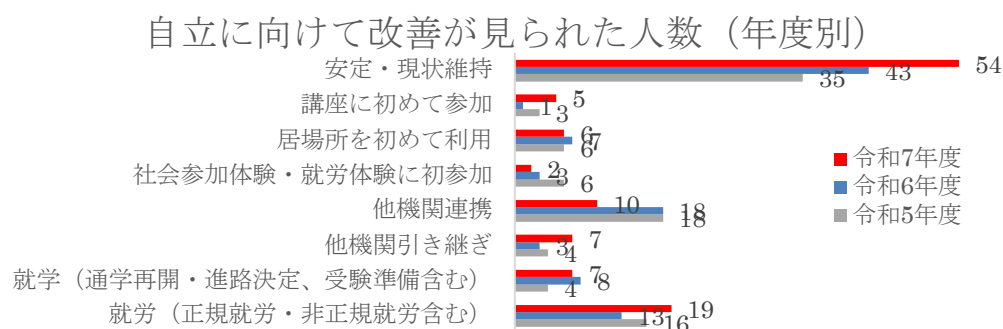
その中でも、より良い現場を構築していくことを目指して、二つの取り組みに注力してきている。

まず一つ目は、丁寧な個別面談の実施である。ユースプラザ事業は15-39歳と年齢こそ区切られているものの、利用層はひきこもりを中心としつつも曖昧であり、多様な層が来館に至っている。その中で、個別的な事情をなるべく汲みながら支援を展開してきており、来所相談831件、区役所における専門相談88件など、高い数値を維持してきている。1件の相談を単なるアドバイスや利用機関へのガイダンスにとどめるのではなく、相談に至った深い事情を聞き取ったり、素直に胸中を語れない若者たちとの信頼関係に回を重ねたりと積極的に行ってきた成果といえる。

ついで2つ目は、プログラムの充実である。日によっては利用者が少なく閑散とする居場所は、それ自体が現場として支援力を削がれていってしまう。多様な人が訪れ、幾つもの交流の生まれる場であって初めて現場として機能する。そのためには、いつも

一定の人のいる居場所を取り戻していくことが重要という認識から、利用者同士の交流を主目的とした様々なプログラムの実施をこころみた。結果として、過去3年でも極めて高い参加者数を上げている。多くのプログラムを打ち出し、これに多くの利用者が参加した。利用者の中にはプログラムこそが目当てで参加するものも目立った。

そしてこれらの取り組みは実績にも一定反映された。プログラムに初めて参加した人数の増加はもとより、就学や就労も過去3年間の中でも高い数値となっている。そして言わばこれらのアウトカムの確証をえることこそが、次年度のテーマになるのではないだろうか。



よこはま北部ユースプラザ実績

	2023 年度	2024 年度	2025 年度
開所日数	282 日	277 日	280 日
利用者数（本人・保護者・関係機関を含む）	延べ 3,602 名	延べ 2,934 名	延べ 2,598 名
新規利用者（見学・保護者のみ含む）	103 名（本人性別：男 67 名、女 36 名）	104 名（本人性別：男 59 名、女 45 名）	64 名（本人性別：男 35 名、女 29 名）

2025 年度 実施プログラム

講座名	実施回数	参加人数	主な活動内容	時期・頻度
アートプロジェクト準備	2	12	横浜市が主催するイベントのアート作品の展示作業を実施。	不定期
インテリア妄想会	1	5	居場所のインテリアや間取りを妄想してみようという会を実施。	不定期
大掃除	2	14	年末に利用者とスタッフ全員で施設の清掃を実施。	12 月
カードゲーム交流会	1	6	カードゲームを持ち寄り、初心者にも教えながらゲームを実施。	不定期
句会	8	26	俳句を一句詠むことはもちろんのこと、俳人当てクイズや句の貼り出し作業も主体的に実施していた。	隔月
グリーンラインウォーク/会議	2	18	横浜市営地下鉄の全駅を、1 日間かけて徒歩で制覇する企画。	10 月
クリスマスイベント	1	13	季節行事。パンプキンパイやクイズ大会を実施。	12 月
クリスマス・大掃除準備	1	4	季節行事や大掃除企画を、利用者と話し合いや準備を実施。	12 月
雑談部	2	11	「雑談とは何か」から始まり、利用者が話したいことを話す企画。	不定期
人生ゲーム交流会	8	32	ボードゲームを通じて利用者間の交流を図る企画を実施。	月 1 回
新年散歩（初詣）	1	5	近くの神社へ初詣に行く企画。	1 月
体育館へ GO	1	6	地域のスポーツセンターを利用し、バスケットボールやフットサル等、身体を動かす機会提供と利用者間の交流を深める。	5 月
卓球交流会	10	45	新規利用者でも参加しやすい企画として実施。教え合ったり、協力してラリー記録更新を目指したり、試合を通じて交流を深める。	月 1 回
Dig 音	12	90	テーマを決めて好きな音楽の紹介やイントロクイズを実施。	月 1 回
トークアワー／テーマトーク	3	12	聞いてみたいことや話してみたいテーマを利用者に募り、話をしながら交流を深める企画を実施。	不定期
年越しそばを食べる会	1	11	みんなで年越し蕎麦を食べながら、大掃除等の頑張りを労いつつ、振りがえりを実施。	12 月
トランプ交流会	20	71	新規利用者でも参加しやすい企画として実施。ババ抜きや神経衰弱など比較的簡単なトランプゲームから交流を深める。	月 1 回
夏祭り会議・夏祭り	1	13	季節行事。浴衣、大喜利、ポップコーン、ゲームなど多岐に渡って企画を実施。	8 月
脳トレパズルで遊ぶ会	8	30	各々クロスワードやナンプレ等をしたり、スクリーンを使用してみんなで間違い探し等実施し、交流を図る企画を実施。	月 1 回
花見を愉しむ会	1	8	近くの公園へ花見に行き、花を楽しんだり、キャッチボールなどのアクティビティを実施。	4 月
百人一首	1	8	坊主めくりや百人一首を実施。交流を図る企画。	不定期

フリフェス mtg	6	27	県の青少年センターが主催するイベントの準備会議を実施。	不定期
プログラム会議	1	8	利用者と一緒にやってみたいことを話し合い、プログラムの企画を立案する会議を実施。	不定期
文集（きたぺら）の集い	19	84	文集発刊のための編集会議を実施。利用者が主体となって話し合い、本年度は2冊を発行した。	月1-2回
ボドゲアワー	4	19	時間をしっかり取って所要時間の長いボードゲームを実施。	不定期
松本先生プログラム	2	8	嘱託医の先生から感情のコントロールの仕方を教わったり、茶話会を実施したりした。	不定期
もくもく会／蠟燭を灯す会	10	41	キャンドルの灯りの中で過ごす。いつもの居場所の雰囲気とは違う雰囲気の中、キャンドルを囲んで話をしたり、リラックスしながら過ごす企画。	月1回
ゆく年くる年	1	8	1年間のユースプラザの出来事やプログラム、個人の振り返りを実施。	12月
ゆるゆる体操&ストレッチ	4	11	居場所で強度の低い体操やストレッチを実施。ゆるさもあり身体を動かしたい利用者が多数参加。	月1回
ゆる写真部	1	7	日常や生活、イベントの写真をシェアして、どんなことがあったのか、どんな気持ちだったのかをシェアし交流を図った。	不定期
料理プログラム（お料理クラブ）	9	46	利用者で話し合いメニューを設定。	月1回
レトロゲーム交流会	9	53	懐かしいゲームを楽しむ企画。教え合い、協力してクリアを目指しながら交流を図る。	月1回



グリーンラインウォークの様子



人生ゲーム交流会の様子

4.中高音ひきこもり支援事業「ブリッチ」

(1) 「ブリッチ」～事業概要～

人と会う負担が少ないオンライン・コミュニケーション・ツール ZOOM を使い、ひきこもり支援の専門家が、遠くの友人のような関係性を継続的に提供し、ご自宅での「生活の質」の向上をサポートすることで、次の一歩への橋渡しをゆるやかにアシストする 40 歳以上のひきこもり者に対する実験的な支援事業。本事業は、クライアントと以下の 3 つの約束をして行う。①人に会うこと、働くことを強要しない。②相談を強要したり、家には行かない。③あなたらしくいることを尊重する。現状、オンライン会話サービスの利用者はおらず、中高音ひきこもり支援事業としては、中高音ひきこもり支援の関係者間の勉強会「R40 勉強会」を実施している。

「ブリッチ」振り返り

異業種ネットワークにより 8050 問題の支援の在り方について考える「R40 勉強会」は、隔月 1 回オンラインでの活動が継続している。参加メンバーは固定の方々が徐々に増えている。不定期の方々が、主にひきこもり支援者よりも、高齢者支援者の方が多いのも、課題感のリアリティーなのだろうと思う。

また、大学等の研究者の方々が興味を持たれ、勉強会に参加して下さったり、学会発表を依頼して下さったりしており、自分たちが日頃している議論から得た知識が、一般的には目から鱗の知識であることを実感している。

直近のトピックスを紹介すると、高齢者には子のひきこもりを解決しようと積極的に考える親は少なく、ケアマネ等には触れてほしくないトピックスになっていることが多い。また介護支援者も積極的介入する解決思考の支援者は、制度的にも、労働制約的にも少なく、自身の仕事ではないと見て見ぬふりしてしまう支援者が多いというのが、現場管理者の実感とし浮かび上がっている。

高齢保護者を奮起させることは不可能であり負担感が強過ぎて変化を求められない。そうであれば、第一発見者である支援者が、次にどのようなアクションを起こすかが非常に重要になってくる。現場で精一杯活動する支援者をどのようにエンパワメントしていくのか？制度がどのように変われば動けるのか？包括支援センターのどのように役割を果たせるのか？このように具体的な課題が明確になって来ている。しかし、最終的には高齢ひきこもり者が家を出る場＝居場所がない。どのような居場所があるべきか？このようなことを私たちは、異業種連携の緩やかさの中で語り合っている。

2025 年度の開催は 4/22、6/18、8/27、10/21、1/13、3/10 計 6 回。

5. 啓発事業

(1) 校内居場所カフェ・スタッフ養成講座事業

本年度は、自主開催はなく、宮城県仙台市・石巻市で活動する認定 NPO 法人 Switch が開催した全 5 回の「校内居場所カフェネットワーク研修」で石井が二日間の講師を務めさせていただいた。当法人としては、校内居場所カフェの数の発展のみならず、質の向上に貢献していくことをミッションに、校内居場所カフェ全国ネットワークと共に、啓発・研修事業を継続していきたい。

高校内居場所カフェ ネットワーク研修

— 学校と地域が協創する安心の場づくり —

高校内居場所カフェは、学校と地域の支援団体が協力してつくる“気軽に立ち寄れる場”であり、学校と地域の協働を進める新しい形の取組として注目されています。生徒にとっては相談のハードルを下げ、学校を離れた後の孤立予防につながります。

本研修では、高校教員や学校関係者と地域の支援者が学び合い、居場所カフェの意義や広げ方を共有しながら、協働の形を考えていきます。

対 象	高校等の教員・学校関係者、若者等支援に関わる方
回 数	全 5 回 (令和 7 年 1 0 月～令和 8 年 1 月)
定 員	各回 15 名程度
会 場	認定 NPO 法人 Switch (仙台駅東口すぐ) 宮城県仙台市宮城野区榴岡 1-6-3 東口風月ビル 6 階 601 号室
参加費	無料
お申込方法	各回ごとに裏面の QR コードからお申込みください

内 容

10/31(金)「高校内居場所カフェとは何か
— 学校と支援機関の共通スタートライン —」
講師：NPO 法人パノラマ 理事長 石井 正宏氏 (びっかりカフェ@神奈川県立田奈高等学校)

11/1 (土)「カフェスタッフ養成講座」
講師：NPO 法人パノラマ 理事長 石井 正宏氏 (びっかりカフェ@神奈川県立田奈高等学校)

12/12 (金)「学校の中に居場所カフェをつくる」
ワークショップ

12/24 (水)「高校教育の様々な形と校内居場所カフェに期待すること」
講師：宮城県教育庁高校教育創造室 県立高校開設準備室 第一班 室長補佐 村岡 正良 先生
宮城県石巻北高等学校飯野川校 進路指導部 部長 早坂 祐次 先生

1/23 (金)「学校と支援機関で協創する安心の場」
話題提供：宮城県教育庁高校教育創造室 県立高校開設準備室 第一班 室長補佐 村岡 正良 先生

※詳細は裏面をご覧ください

名義後援：宮城県教育委員会、仙台市教育委員会、石巻市教育委員会、河北新報社
主 催： 認定 NPO 法人 Switch ユースサポートカレッジ石巻 NOTE
問い合わせ先：Tel 0225-25-5374 info@npo-switch.org



この研修は令和 7 年度 NPO 等の絆力を活かした震災復興支援事業助成金で実施しています

6. 事務局

(1) 組織基盤強化事業 ～事業概要～

パノラマは、校内居場所カフェからスタートし、2025 年度までは小学生から 40 歳以上までの幅広い年代での事業を展開し、全国ネットワークも組織化する等、法人事業が拡大してきた。一方で、組織体制の強化が追いついていない現状があり、問題が散見されてきた。2023 年度以降は事業拡大ではなく、事業の安定化と深化を目指していく中で、基盤強化事業により、組織の課題を洗い出し、より多くの子ども・若者のニーズに応えられるような強固で持続可能な組織体制を構築していくことを目指す。

2025 年度は、2023 年度の大和証券基盤強化助成事業から関係を構築してきたコンサルタントに、組織全体の課題についてはスーパービジョンという形で折に触れて相談することにし、主によこはま北部ユースプラザにおいて、コミュニケーションをさらに深める取り組みに注力し、ワークショップを複数回実施した。

「法人の組織基盤が安定することで、こども・若者によりよい支援を持続的に届けられる」という考えのもと、基盤強化を行い、理事会機能の強化や組織全体のコミュニケーションの深まりなど、一定の効果は感じられている。しかしながら、組織も変化していく以上、基盤強化は一時的に行うものでなく、今後も継続して取り組んでいく必要がある。

【組織基盤強化事業 振り返り】

Panasonic NPO/NGO サポートファンドの基盤強化事業 2 年目に採択いただき、昨年と同様、認定 NPO 法人アカツキに事業全体の伴走支援をお願いした。【人事・組織環境改善】 【財務改善】 の 2 軸のうち、【人事・組織環境改善】にメインで着目して取り組みを実施。

①組織体制の整備と体制強化

- 理事会の機能化：2023 年度まで定期総会前の理事会や不定期開催であった理事会が、本事業 1 年目のアカツキ報告を受け、2024 年度は隔月に 1 回開催されるようになった。組織全体の運営状況について理事全員が把握し、事務局や業務執行責任者である理事長に適切なアドバイスがなされるようになった。
- 管理職研修の定着：アカツキ報告で管理職に責任が集中し、ケアがなされていないという指摘を受け、1 年目に引き続き 2 年目も（株）HR インスティテュートによる管理職研修を実施。1 年に一度継続して実施することが定着した。

②研修パッケージの完成

従来は部門ごとに、行政からの研修のお知らせなどを踏まえて、支援スキル研修や個人情報保護研修など、業務の遂行に必要な研修を受講しているのみであった。本事業により、入職時研修（パノラマについて学ぶ研修と個人情報保護研修の 2 つ）が確定した他、期初に全体研修を計画し、全体研修でカバーできない部門ごとの研修は部門の責任者を筆頭に策定することになった。また、毎年必須の全体研修については、内容は法人状況を踏まえて年度ごとに変えていくものの、題目は①NPO とは何か ②こ

ども若者の人権研修 ③管理職研修 の3つとすることになり、法人全体研修としてパッケージ化することができた。

③対話の仕組み作りについてのナレッジ獲得と北プラ行動指針の策定

よこはま北部ユースプラザ（以後、“北プラ”）では、コミュニケーションワークショップの実施を行った。アカツキと北プラ施長・副施設長、事務局長で議論し、ワークショップの内容の大枠を決めたのち、アカツキが実施の叩き台を作成し、それをさらに北プラ・事務局長で話し合い内容や伝え方の細かい点を修正して、アカツキのファシリテーションのもとで実際にワークショップを実施、実施した際のスタッフの発言や現場での変化を踏まえた上でワークショップを振り返り次回のワークショップを計画するというサイクルを回し、最終的に行動指針である「北プラコンセプト」の策定に至った。本サイクルの結果、北プラ内でどのように対話の仕組みを作り、実行していけばよいのかというナレッジが事務局・管理職・現場に蓄積された。

④基盤強化事業の対外発信と自分たちの価値の確立

自分たちが考える「基盤強化」の取り組みを地域に発信し、市民活動としての一つのあり方を示すことができた。1月30日の報告会には地元の主要NPOのリーダーたちが多数訪れ、「基盤強化事業」についてそれぞれが悩み、課題を感じている様子が明らかになった。痛みを伴う内部改革について、対外報告会をする法人がほとんどない中で、「最短・最速で結果を求めない」「試行錯誤しながらも進めていく」パノラマの泥臭い方法を地域の市民活動のアクターに伝えることができたことは一つの成果と考える。また、時間や労力のコストがかかる一見回り道のようなやり方が、結局のところ組織を強くするのではないか、というメッセージを発信する報告会をしたことで、自分たちもメッセージの意義・価値を再確認し法人としての価値観が一定程度確立したのではないかと考える。



写真左：北プラコンセプト策定時のポストイット
写真中央上：1/30 報告会の様子
写真中央下：北プラのワークショップのタイトル
写真右：1/30 報告会チラシ



4 補足：段階を踏んだワークショップ

- 5月：ふりかえり評価（北プラの中で触れなかった/もやもやと大事にしていたこと）
- 7月：私と北プラ/これまでとこれから
- 9月：相互理解ワーク「若者と私」
- 10月：今、若者支援をしている私はこうして出来上がった！
- 11月：北プラっぽいと思う支援について
①若者に対して何を大切に、どう関わり
②私たちが若者に対してできたと思うこと
- 12月：北プラコンセプト 策定

パノラマ

Panasonic NPO/NGOサポートファンドfor SDGs
組織基盤強化事業報告会
～パノラマ2年間の格闘の軌跡～

NPO法人パノラマ
代表理事 山口 真知子
理事 鈴木 昌子
理事 陶山 哲夫
副理事長 今田 千明
常務理事 有田 幸子
常務理事 長岡 隆雄
常務理事 長岡 隆雄
常務理事 長岡 隆雄

1.30金
19:00-21:00

場所 スプラス青葉台
〒227-0062 神奈川県青葉区
青葉台1-1-1 青葉区民センター2F
東急田園線青葉台駅 徒歩約10分 徒歩約3分
(徒歩約10分は徒歩約3分)

参加費 無料
定員 40名

主催・お問い合わせ
NPO法人パノラマ
npn-panorama@gmail.com <https://npn-panorama.com/> panorama.jp

事業の拡大により、組織内部のアップデートを急いでいるNPOは少なくないのではないのでしょうか。NPOの組織基盤強化の取組みや実績はあまり知られていません。本報告会では、NPO法人パノラマが、Panasonic NPO/NGOサポートファンドの協力を得て、基盤強化に取り組んだ2年間の軌跡をお話しします。

お申込みはこちらから
(受付は先着順)
料金 1,290円
詳細はこちら

以上